

学位論文審査の要旨

| | | | | |
|---------------|--|------------|-------------------|--|
| 学位申請者 | 葭内 ありさ 人間発達科学専攻2015年度生 | | 論文題目 | 高校家庭科におけるエシカル消費に関する 教育デザイン研究 |
| 審査委員 | 主査: | 小玉 亮子 教授 | インター ネット 公表 | 学位論文の全文公表の可否 : 否 |
| | 副査: | 富士原 紀絵 教授 | | 「否」の場合の理由 |
| | 副査: | 斎藤 悦子 教授 | | <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む |
| | 審査委員: | 刑部 育子 教授 | | <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある |
| | 審査委員: | 大多和 直樹 准教授 | | <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている |
| 学位名称 (英語名) | 博士 (社会科学) (Ph. D. in Social Sciences) | | | <input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている |
| | | | | <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている |
| | | | | ※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について |

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、現代の持続可能性に関わる喫緊の諸課題に対応するための教育デザイン研究を、エシカル消費を題材として必修の高等学校家庭科で試みたものである。具体的に検討対象としたのは、国立大学附属A高等学校における2011年以降の授業実践である。

本論は三部からなり、第Ⅰ部、と第Ⅱ部でエシカル消費の教育実践の分析で、第Ⅲ部でエシカル消費を学んだ卒業生等のインタビュー分析である。第Ⅰ部の授業実践分析では、第1章フェアトレード、第2章伝統技術と天然素材、第3章アップサイクル、第4章ソーシャルプログラム、第5章アニマルウェルフェア、第6章サステナブルマテリアルに関する実践を扱い、各カテゴリーに関する概要を示すと共に、生徒の製作物・発信・振り返りから見えてくる学習の深化を明らかにした。第Ⅱ部では、第Ⅰ部では取り上げなかった生徒が制作した発信物や発信活動を中心に論じている。具体的には、第7章では、服の製作を取り上げ、第8章では、異校種への高校生による訪問授業について、第9章では、学内・学外のイベントや、コンテストにおける発信について扱っている。授業のデザインにおいては知識・体験・発信のプロセスを取り入れ、分析の際には生徒の学びの「内化」と「外化」に着目した分析がなされた。

研究の結果、授業の中で生徒が内化と外化の往還を行いながら学びを深め、課題を「自分ごと化」していくプロセスが明らかにされた。また、「足場かけ」理論を授業のデザインに取り入れ、持続可能性に関する教育においては、段階的な学びのほか、共有の時間における相互の足場のかけ合いや、年少者から年長者への「足場かけ返し」も可能となり、これらを通じて、生徒の学びが拡張されることが明らかにされた。第Ⅲ部第10章の卒業生へのインタビューでは、語りを知識・体験・発信の切り口で整理し、教室外も含めて他者に発信することが、内化を深める機会となるだけでなく、自己のエシカルな行動への責任を認識させ、さらなる行動に繋がること示唆された。卒業生は、環境や人権、社会にも考えを及ぼしており、各要素を包括するエシカル消費を授業の題材としたことの意義が認められた。

授業は領域横断で行い、家庭科の各分野の領域を超えた授業を構成し、また、家庭科と他教科の領域も横断するもので、さらに、企業、諸団体、行政そして異校種の学校等といった多角的な連携、ICTの活用等、さまざまな境界線を超える試みをおこなったことで、生徒は学びと実社会との繋がりを理解し、多面的な消費の背景への眼差しを獲得したことが確かめられた。このことを踏まえると、教師には、人的・物的な様々な資源から授業のデザインを構想する、いわば、プロデューサーとしての役割が求められることが示唆された。今後の課題は、現在顕著になってきたエシカル消費の商業化が孕む問題点を踏まえ、すでにエシカル消費に関する高校生の経験や理解が一律ではないことや、時々刻々変化する持続可能性に関する最新動向を射程に入れた、新たな教育手法の開発であるとまとめられている。

第一回審査会は6月20日に開催された。執筆者本人から論文の説明を行い、本研究は、授業を対象とした教育デザイン研究であること、授業と生徒の学びのプロセスを内化、外化、足場かけをキーワードに分析した旨の説明がなされた。これに対して、審査員からのコメントとして、理論分析の部分の説明が不十分な点が認められるため、理論についてさらに深めること、また、授業のデザインの一般化の可能性について論じる必要があること、加えて、論文構成の再検討が必要であると指摘された。そこで、第二回審査会を7月20日に実施し、改訂された論文について審査を実施した。第二回審査会では、概ね第一回審査会でのコメントへの対応がなされていることが確認され、7月31日に公开发表会並びに、最終審査会が実施されることが認められた。公开发表と質疑応答は適切に実施され、最終審査会では、残された課題はあるものの、エシカルを題材とした先駆的な授業デザイン研究であるとして、博士(社会科学)、Ph. D. in Social Sciencesと認められた。